

さりげなく、大胆に

使い手と作り手の対話、実践そして実現

第2回 国際ユニヴァーサルデザイン会議2006in京都

京都コーナー報告書



The 2nd International Conference for Universal Design in KYOTO 2006

第2回 国際ユニヴァーサルデザイン会議

2006 in 京都

2006年10月22日～25日

会場：国立京都国際会館展示場

目次

■ ご挨拶	2
■ 京都委員会と京都コーナー	3
■ 京都コーナーイベントの概要	
10月22日	
・どんどんひゃらら どんひゃらら おひさま太鼓を打ち鳴らせ	6
・よさこい踊り隊!	6
・こどもデザインチャレンジ実施報告会&表彰式	7
・みやこユニバーサルデザインシンボルマーク表彰式	9
10月23日	
・京都ライトハウスUDへの試み	10
・UD対談	11
・UD映画の上映報告	11
・尺八演奏	12
・珍獣王国ライブ	12
・市民のためのわかりやすいUD講座	13
・くらしにやさしい ものづくりまちづくり 京都消費者大会報告	14
・第26回京都デザイン会議	15
10月24日	
・らくらく観光in京都	16
・会場へのアクセスマップ	17
・京町家とUD	18
・UD教育と実践	19
・人にやさしいものづくり	20
・ユビキタス時代におけるインタラクションのユニバーサリティ	20
・「楽しみ」のノーマライゼーション	21
・カラーユニバーサルデザイン	21
10月25日	
・親と子のエコ&ユニバーサルデザインのためのワークショップ	22
・京都の3大学共同プロジェクト「公共空間のユニバーサルデザイン」	23
■ スナップ写真①	28
■ 展示コーナーの概要	
・みやこユニバーサルデザインの普及推進	30
・顔型に直交ローラーを配置したコンピューター用マウス	30
・手話アニメーションの立体視による分かりやすさの検討	30
・実践ユニバーサルデザイン	31
・ユニバーサルデザイン研究会Blanco	31
・やさしい漆器	31
■ スナップ写真②	32
■ ご協力いただいた方々	表3

ご挨拶



豊かさは、深く考えて、創造する、という私達が持つ能力がもたらす賜物です。不可能なことを克服し、より高い次元へと求め続けることが、豊かな社会を実現することにつながります。このことは、「国際ユニヴァーサルデザイン会議2006 in 京都」における、専門家による本会議、参加企業による展示、そして市民の皆様による共同提案に、その一端を見ることができます。京都は、1200年来の古都、山紫水明の豊かな自然を有する比類なき美しい街であり、世界にとってのあこがれです。この京都に、世界の人々をお招きし、京都の府民、関連企業、大学、そして非営利団体等の皆様が、手作りで作り上げたこの京都コーナーにお越しいただいたことは、何よりも光栄に存じます。私達の今回の挑戦は、他に例を見ないこの古都の持つ伝統に培われた独自のライフスタイルと、まだまだ完全ではなく不十分な現代のユニバーサルデザインとを関連づける取組であるといえます。このコーナーにお越しいただいた方々や、この報告書をご覧下さった方々が何かを感じて頂き、そして、お持ち帰り頂き、あらゆる分野に、ユニバーサルデザインの息吹が広がればと願っています。

最後になりましたが、今回の会議に関わった京都委員会関係者各位、そしてIAUD事務局の方々に心より御礼を申し上げるとともに、ご提案頂いた数々の夢が現実になることを願っています。

国際ユニヴァーサルデザイン会議2006 in 京都
京都委員会委員長 モンテ・カセム



「さりげなく、大胆にー使い手と作り手の対話、実践そして実現」をテーマに2006年10月22日から26日まで開催した「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議2006 in 京都」(京都会議)は、当初の予想(13,000名)を上回る世界30ヶ国から延べ14,700名のご来場を賜り、お陰様で無事に成功裡に終えることができました。IAUD総裁であります寛仁親王殿下におかれましては、体調が万全でない折に開会式へのご出席並びにお言葉を賜り、関係者にとってその意義は大きく、成功への最初の一步となりました。また、今回は日本の歴史、文化を代表する京都で開催させていただくにあたり、京都委員会を立ち上げ、カセム委員長はじめ関係者の皆様から多大なご尽力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。京都委員会は一過性の運営組織ですが、培った成果は永遠です。IAUDとしては京都会議の理念と成果を次年度の活動に継承し、更なる飛躍を目指します。今後ともIAUDに対する皆様のご支援・ご鞭撻を何卒よろしく願いいたします。

国際ユニヴァーサルデザイン協議会(IAUD)
理事長 川口 光男

■ 設置主旨

京都委員会は、「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議2006in京都」が京都で開催されるに当たり、開催地としての会議への協力を行う他、京都コーナー等を活用した、地元の様々な取組の情報発信をするための事業の企画・運営を行ない、府民のユニバーサルデザインへの関心を高めることを目的として設置されたものです。

この委員会では、京都における様々なユニバーサルデザインの紹介だけでなく、各委員を中心に、自ら、市民、大学、学生、子どもたち、企業、デザイナー、行政等がいっしょになって、ユニバーサルデザインを題材にした様々な研究、デザイン、イベントの企画に取り組みました。その成果を京都コーナーのステージや展示コーナーで紹介させていただきました。

■ 京都委員会の運営組織



● 委員長 モンテ・カセム

第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議組織委員、立命館アジア太平洋大学学長、学校法人立命館副総長。1947年スリランカ生まれ。70年にスリランカ大学自然科学部建築学卒業し、国費留学生として72年来日。東京大学大学院工学系研究科博士課程都市工学専攻単位取得。マレーシア工科大学講師、日本地域開発センター研究員等を経て、85年に国連地域開発センター主任研究員に就任。94年に立命館大学政策科学部教授に、2004年に立命館アジア太平洋大学学長並びに学校法人立命館副総長に就任。マレーシア経済学会終身会員。専門分野は、産業政策、環境科学、国土計画、都市工学、建築学。



● 副委員長 久保雅義 京都工芸繊維大学教授

京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科 教授／ブランドデザイン教育研究センター長。松下電器産業（株）で海外向け商品開発デザインや高齢者の生活研究を行い、「座シャワー」の開発などに携わる。またパナソニックデザイン社の創設や松下電器CIマニュアルの作成などのブランドデザインに携わる。現在、京都工芸繊維大学繊維学部デザイン経営工学科教授及び、同学ブランドデザイン教育研究センター長。



●幹事 あざみ祥子

第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議組織委員、NPO法人コンシューマーズ京都事務局長。その他、エコクッキング研究会・京都配食グループ連絡会代表、葵学区民生児童委員協議会会長など。

環境、福祉、食等、くらしの安心安全問題に対して消費者の立場から調査・研究し、一般市民に対する啓発活動と共に国・自治体等への政策提言を行っている。



●委員 曾和治好

京都造形芸術大学教授 農学博士 通信教育部長、ランドスケープアーキテクト、トランペッター。京都市みやこユニバーサルデザイン審議会委員。主な研究に、京都の庭園における音環境の研究。庭園からランドスケープデザインまで、五感をキーワードに研究と創作活動に携わっている。

著書：ベーシックスタディ「ランドスケープデザイン」

(オブザーバー)

- 京都府 産業支援室産学公連携推進チーム
- 京都市 保健福祉局保健福祉総務課
- 京都商工会議所 産業振興部
- 京都文化交流コンベンションビューロー

(学生コアスタッフ)

- 立命館大学 村田京子 (Discovery Research Laboratory)
- 京都造形芸術大学 木戸環希 (環境デザイン研究センター)
- 京都工芸繊維大学 佐藤圭一 (大学院工芸科学研究科)

<事務局>事務局長 川原久美子 (第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議事務局長)
株式会社 大広

京都コーナーイベントの概要

10月22日

どんどんひやらら どんひやらら おひさま太鼓を打ち鳴らせ

(主催 おひさま太鼓)

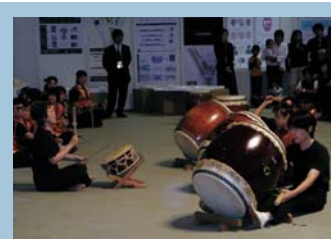


(参加者の声) この日のために新調した衣装で大満足—こんな大きな大会に出演できてうれしかった。

京都コーナーのオープニングを華々しく、そして勇壮に飾る「おひさま太鼓」です。

「おひさま太鼓」は、障害児・障害児を持つ親たち、そしてまわりのボランティアによる太鼓の演奏集団です。いつもは出身の葵小学校で練習しています。「障害を持って生まれた子どもも地域の子、ふつうに地域で暮らしたい、させてやりたい」と「下鴨おもちゃの会」が誕生して25年、小さいときには「おもちゃライブラリー」、小学校は「おひさま

学級」、中学校では「障害児学級」とみんないっしょでした。そして今、それぞれ進路は違いますが、生まれ育った地域で、私たち、僕たちこんなにガンバッテいるよ、そんなメッセージをこめて、仲間たち20名「おひさま太鼓PARTⅡ」、「秩父屋台囃子」、「福井三つ打ち太鼓のリズムにのって」を力いっぱい演奏しました。



(参加者の声) 「Tちゃんはいよいよプロになるね」—おじさん・おばさん応援団も感涙!

よさこい踊り隊!

(主催 よさこい踊り隊)



(参加者の声) とても上手に踊れて良かったでした。化粧もして、メイクをつけてしたので格好よく決めました。

平成17年5月、ある地域の「ふれあいまつりで何かやりたい!!」、「じゃあ、『よさこい』どう?」、「やってみる!!」とごく気楽に、期間限定のつもりで始めたら、「終わりたくな〜〜い!!」の声に押されて1年が過ぎました。以前からダンスの好きなダウン症のT君は健常者と一緒にいろいろなイベントに出演し、高知の「よさこいまつり」にも出掛けていました。T君のリードもあって、「こんな難しい振り付けが覚えられるの?無理!」という声にもめげず「皆踊れるようになるからね!」

と練習に励みました。思うように身体が動かず、困惑しながらも必死について行こうとする人、上手にアレンジして踊っている人、できる限り振り付けに忠実に踊ろうとする人、自分に納得が行かず涙が出てしまう人、人の振りが気になるほど自分の振りは気にならない人、本当に個性豊かな隊員達です。そんな隊員達は京都コーナーでひとつになって踊りました。



(参加者の声) たくさんの人に見てもらってうれしかったです。でも、緊張しました。

こどもデザインチャレンジ実施報告会&表彰式

(主催 立命館大学DRL 村田京子 他)



後藤義明氏 (IAUD2006 in 京都 実行委員会副委員長) とモンテ・カセム先生 (学校法人立命館 副総長) に表彰される子どもたち

2006年8月8日から11日に開催された「こどもデザインチャレンジ」の実施報告会と表彰式が、国際会議の京都コーナーで行われました。

「こどもデザインチャレンジ」は、子どもたちがユニバーサルデザイン (以下UD) の概念に基づいてモノやサービスをデザインし、これからのUDに対する姿勢を考えることを目的としたワークショップです。

デザインチャレンジの対象者は、京都市内の小学校、中学校、高等学校に通う生徒たちです。小学生の部と中高生の部に分けられ、小学生 (6グループ) は「家の中の楽しいUD」、中高生 (4グループ) は「屋外の楽しいUD」について取り組み、発表しました。

この日の報告会では、デザインチャレンジの概要紹介の後、子どもたちの活動の様子がビデオで伝えられました。その後、子どもたち全員がそれぞれ考案したUDを発表しました。最後に9月に行われた審査会の結果発表が行われ、表彰式が行われました。会場には、参加者の保護者の皆さんをはじめ、国際会議に出席された研究者の方々など、多くの皆さんに集まっていたき、子どもたちは、その中で生き生きと自分たちの考案したUDについて話しました。



中高生グループの発表



小学生グループの発表

<8月に行われたこどもデザインチャレンジでの子供たち>

IAUD2006 in京都に向けて、事前に京都の皆さんにUDを知ってもらうことも、「こどもデザインチャレンジ」の1つの目的でした。

小学生対象のデザインチャレンジ（8月9日、11日開催）では、こどもたちは「UDクイズ」を通じてUDを学び、高齢の方や体の不自由な方の体の状況や気持ちを理解するために「キャップハンディ体験」をしました。その後、「家の中の楽しいUD」をテーマに、6グループが各班のコーディネーターとともにそれぞれUDを考案しました。



クイズに答えながら、UDを学ぶ。



キャップハンディ体験で、モノへの接近方法を考える。



模造紙にアイデアを描き出す。



全員集合！

中高生対象のデザインチャレンジ（8月8日、10日開催）では、参加者の多くがUDについてある程度理解していることから、事前課題でUDについての基礎学習をしてきてもらいました。当日は、加藤公敬氏（IAUD理事・富士通株式会社総合デザインセンター長）によるUD講義を行っていただいた後、「屋外の楽しいUD」についてUDを考案しました。

これらの実施報告及び、子どもたちの作品は、IAUD2006 in京都の京都コーナーにて、ポスター展示でも報告されました。



左上：加藤公敬氏によるUD 講義
 右上：公衆電話への接近方法を考える生徒ら
 左下：デザインチャレンジ直後の発表の様子
 右下：作品例「Forest」



みやこユニバーサルデザインシンボルマーク表彰式

(主催 京都市)



京都市では、みやこユニバーサルデザインに対する市民の皆様の関心を高め、理解を促進するためのシンボルマークを募集しました。全国から応募のあった312もの作品の中から、川原啓嗣IAUD専務理事の参加も得て、みやこユニバーサルデザイン審議会部会での審査の結果、長瀬 護さん(東京都)の作品が京都市長賞に選考されました。長瀬さんは「みやこユニバーサルデザイン頭文字のMUDをモチーフにし、愛情や、やさしさの象徴でもあるハートの形で表現した。また、3つの異なる形状の文字でハートを表現することにより、いろいろな人が集まって気持ちをひとつにし、ユニバーサルデザインを築いていくものになればという気持ちを込めました。」とのメッセージを残されています。また、優秀賞作品として、樋口 功さん(大阪府)、安富 勝弘さん(熊本県)、荒谷 洋さん(京都府)、井口 やすひささん(東京都)の各4作品が選考されました。表彰式では、上原京都市副市長から賞状が、水谷幸正みやこユニバーサルデザイン審議会会長から副賞が授与されました。



上原副市長から賞状を授与される長瀬さん

京都ライトハウスのユニバーサルデザインへの試み他

(主催 京都ライトハウス)

■ユニバーサルデザインの試み(三浦 研 大阪市立大学助教授)

手狭になり、また老朽化したことから、平成10年から着手した京都ライトハウスの建物の建替えでは、設計前(平成13年5月)からユニバーサルデザイン委員会を設置し「全ての人が利用しやすく、親しみのある施設」「視覚障害者の動線に配慮し、利用しやすい」を基本に据えて進めてきました。しかし、建物の完成後も更なる利用者の利便性を図るため、「ユニバーサルデザインの試み」を主要テーマに、同研究会の高田光雄教授(京都大学工学部)、三浦 研助教授(大阪市立大学生活科学部)、(株)内藤建築事務所に様々な実証実験を行っていただきました。京都コーナーでは、三浦助教授に歩行観察調査に基づく点字ブロックの使われ方特性を中心に、この研究結果の概要を報告していただきました。

この報告では、「一階入り口の点字ブロックは足からの情報認識を前提とし、その計画方法も視覚障害者がその上を歩くものとされている。しかし、その使われ方には、足での踏み方や白杖の使い方が各三種見られるなど一様ではなく、足と同様に白杖による情報認識の可能性を検討する必要がある。」という指摘や、「玄関ホールと廊下が交差する空間に手がかりとなる誘導情報が少なく不安定な歩行が確認された。点字ブロックと壁、あるいは壁と壁との位置情報が連続し、白杖やつたえ歩きしやすいように、玄関ホールと廊下の交差部の四隅



司会する深田さんと安田さん



講演する三浦教授。パソコン要約筆記も

を結ぶ情報配置が有効だ。」などの課題が見つかりました。このように、建物が出来るまでの図面などによる検証の重要性はさることながら、建築された後も、図面ではわからなかった課題が生じ、ユニバーサルデザインの難しさと、スパイラルアップ(絶え間ない検証と向上)の必要性がよくわかりました。京都ライトハウスでは、これらの報告を踏まえながら、様々な方が利用しやすいユニバーサルな施設づくりに更に取り組んでいきたいと考えています。

■UD対談(三浦 研氏 山下純一氏, 深田美知子氏, 安田智博氏)

車椅子利用者であり、かつ視覚に障害がありながら、ボーカル&ハーモニカ(ブルースハープ)奏者としてご活躍の山下純一氏、UD映画上映に取り組んでおられる「声のシネマTOMO」の深田美知子氏、視覚に障害がありながら、尺八奏者で放送部インストラクターとして活躍されている安田智博氏に、三浦助教授を交えたメンバーで、UD対談をしていただきました。障害当事者と研究者、ボランティアで繰り広げられた対話の中で、重複障害者にとっての表示位置の問題から、副音声・字幕入り映画の製作に至るまで広範な課題が提起されました。また、建築の専門教育カリキュラムの中に視覚障害への指導内容が全くないこと、デザインをする側と当事者とのギャップがまだまだ大きいこと、商品開発など、ユーザーの側の意見やニーズが配慮されずに作られていることがまだあることなどが課題として議論されました。



■UD映画の上映報告(深田美知子氏)

UD映画のボランティア上映に取り組んでおられる「声のシネマTOMO」の深田美知子さんによるプレゼンテーションをしていただきました。UD映画とは、聴覚に障害のある人、視覚に障害のある人も、障害のない方と同じように映画を楽しめるようにしようとするものです。このため、日本語の映画に字幕と副音声を付けて上演します。DVDなどでは、そういうものも出始めていますが、TOMOの特徴は、過去の映画だけでなく、上映中の映画をリアルタイムでUD上映することです。この日も、上映中の映画である「フラガール」の一部をデモンストレーション上映していただきました。更に、字幕は障害のある人だけでなく、高齢者にとっても映画を理解しやすいと好評だそうです。また、副音声も映像からは気が付かない点を教えてくれる場合もあるそうです。このような活動が一日でも早くあたりまえになってほしいと思います。



■尺八演奏（安田知博氏）

尺八奏者で放送部インストラクターとして活躍されている安田知博さんに、コーナーの総合司会だけでなく、尺八の演奏もして頂きました。安田さんは盲学校在学中の10歳のときから尺八を始め、都山流尺八師範となり、2003年には全国邦楽コンクール優秀賞受賞（尺八部門1位）された方です。また、尺八だけでなく、持ち前の「いい声」を生かして、NHKラジオ第2の福祉番組「共に生きる」に、司会者としてレギュラー出演されたり、また第70回記念選抜高校野球大会の式典アナウンスなど多方面で活躍されています。当日は、「鹿の遠音」と「ハナミズキ」の2曲を演奏して頂きました。その澄み渡る、かつ伝統的な音色に、観客もうっとりしていました。会場の喧騒が忘れられるひと時でした。



演奏する安田さん。会場はその美しい柔らかな響きに包まれ、聴衆は大いに魅了されました。

■珍獣王国ライブ（山下純一氏、篠原 裕氏）

UD対談でお話頂いた、山下純一さん率いる珍獣王国のライブをして頂きました。珍獣王国は山下さんとギタリストの篠原 裕さんとのユニットです。山下さんは、「おもしろければオールオケー」という信念の下、自らの世界観を人間感覚あふれる音で表現されています。手にも障害がありますが、持ち方や奏法を自分なりに工夫しながら、すばらしい音色を聞かせてくれます。篠原さんも学生時代からブルースギターをマスターされ、時には激しく、時にはやさしく演奏を聞かせてくれます。二人の息はまさにぴったりで、「逆境じゃ最強」、「ハッピー」など、素晴らしい曲と演奏を聞かせてくれました。



ぴったりと息の合った珍獣王国

山下さんはパーカッションも得意

演奏の合間には、トークもして頂きました。珍獣王国さんは各地でのライブのほか、学校などへの講演活動もされています。障害者問題をその独特なセンスによる笑いと音楽を交えながらのステージで身近なものに感じてもらい、それらを考えるきっかけにしてもらっているそうです。この日も聴衆を前に、そのユニークな語り口で、笑いを誘いながら、障害者問題やユニバーサルデザインについて話をして頂きました。



暖かく、またパワフルにブルースハープを演奏

篠原さんのあざやかなソロ

市民のためのわかりやすいユニバーサルデザイン講座

(主催 京都市 講師 森本一成 みやこユニバーサルデザイン審議会委員 京都工芸繊維大学教授)

京都市みやこユニバーサルデザイン推進条例を例にして、ユニバーサルデザインの説明がありました。ユニバーサルデザインとはすべての人ができる限り利用しやすいデザインにすることをめざす考え方で、あらゆる人々が暮らしやすい社会の構築に貢献するためには、UDの重要性を広く発信することが必要で、特に、UDの推進には「おもてなし、思いやり、支えあい」の精神を脈々と引き継いでいる京都の牽引力が期待できるとのことでした。そのためには、国際会議のテーマでした「さりげなく、大胆に」行うことが推進のきっかけになるのではとの指摘がありました。また、会場に展示されていた一部の製品を示してUDの紹介がありました。UDの推進には、使い手と作り手の対話や実践そして実現が必要になりますが、展示場を見学するときに次のことに着目して、見学あるいは質問してみたいとのことでした。「機能の代行のみを重視していないでしょうか。」「社会的不利の解消を視野に入れているでしょうか。」「ユーザーの気持ちを支えているでしょうか。」



シャンプーのギザギザの開発

楽な力で取りはずせるマグネット

くらしにやさしい ものづくりまちづくり 京都消費者大会報告

(主催 コンシューマーズ京都)

第37回消費者大会がめざしたもの

コンシューマーズ京都では毎年1回、消費者の願いを集めて、くらしに密着したテーマを決め、ともに考え、行動する消費者大会を実施します。これまで、食料問題、環境問題、平和、税金等々、食やくらしの安全問題を取り上げながら、私たち市民・消費者は新しい21世紀をどう生きたいか、くらしたいか、そのためには消費者団体はどんな役割を果たすべきか等を考えてきました。今年も、第2回国際ユニバーサルデザイン会議が京都で開かれることにちなんで、第37回大会のテーマを「ユニバーサルデザイン(以下UD)」と決めました。障害のある人、高齢者、子ども、妊婦さん、外国の人、さらに男でも女でも、だれでも、どこでも、いつでも手に入れ、使いやすいユニバーサルなものや社会こそ私たちが求める21世紀の社会だと考えたからです。

まず「UDとは何か」を、一般市民・消費者とともに学びました。行政や企業ではどのように考え実践しているのか、サントリービール工場、積水ハウスの納得工房、北野天満宮など現地へ見学訪問を行いました。更に自分たちで実際に街に出て道路や店舗の調査をしてみました。いずれも、くらしやすい社会をめざして一生懸命です。その過程で、心やさしい企業や人々にも出会いました。しかし、いずれも、まだまだ発展途上です。その集大成が9月30日の第37回消費者大会でした。



実地調査。確かめてみないと!!



報告するあざみ事務局長、コメントのIAUD理事 吉浜万蔵さん

京都コーナーでは、この消費者大会の内容の報告や市民が選ぶUD製品投票結果の報告、企業からの取組報告などを行いました。

「市民・消費者は、この運動に積極的に参画していきましょう。行政・企業そして消費者等の協力・協同すなわち協働こそがUDの輝く社会を実現していくことになる」とコンシューマーズ京都は考えます。最後に、御講演頂いた、主婦連合会参与の清水鳩子先生の御言葉で締めくくります。

「私たち自身がUDについて知ることから発し、『こんなふうだったら、もっと使いやすい』などと、どんどん意見を行っていく、そしてUDを『企業や行政を評価するものさしの一つ』として位置づけていくとおもしろいと思っています。」



UD事例報告をする大阪ガス

第26回京都デザイン会議

(主催 社団法人京都デザイン協会、京都デザイン関連団体協議会)

(後援 京都府)

京都デザイン協会及び京都デザイン関連団体のメンバーの皆さんに、デザインの専門家としての立場から、京都のユニバーサルデザイン（以下UD）について意見交換をして頂きました。

その中では、「できるだけ多くの人が利用できる製品、建築、空間をデザインすること」であるUDは私達の日々のデザイン活動や身の回りの「モノ」の中にも見受けられます。又、京都の伝統的な町家の中にある格子や床几は、多くの人にわりやすく、誰もが使えた空間であり「モノ」でもあります。他の様々な伝統の分野にも多く見られます。つまり京都にはUDの土壌があるということ。これを出発点に活発な議論を展開されました。

まとめとして、

- UDとは何なのだろうということを京都のデザイン界の皆さんが意識的にとらえていくこと。
- この国際ユニヴァーサルデザイン会議が普段の活動をもう少し意識的に考えていくきっかけにしていくこと。
- 京都におけるデザインのあり方を考えるうえで、UDというものも含めて検討し協議していくことを、今日をスタートにしたいということ。

という結論で締めくくりとなりました。

(出席者等)

パネラー：荒川朱美 京都造形芸術大学教授（建築デザイン）
：北條 崇 京都精華大学非常勤講師（プロダクトデザイン）
進行：大石義一 京都造形芸術大学教授（建築デザイン）
京都デザイン協会理事



パネラーによる熱心な議論



熱心に聞き入る客席の皆さん

(主催 京都工芸繊維大学久保研究室)



発表者：京都工芸繊維大学 山本筆子

京都観光の代表は社寺仏閣訪問である。歴史的建造物への観光に対して、UDの観点からどのような提言ができるのか、景観を損なわず出来るだけ多くの観光客の満足度を高める提案を検討した。「歴史や文化、自然に触れる」という体験型観光に注目が集まっている中、魅力要素をどのように体験していただくのか、UDを応用した京都の観光を考察し、これからのUDツーリズムのあるべき姿を検討した。

寺社におけるUDの現場調査

受付	チケットを買う パンフレットを受け取る 順路、見所を確認する	受付 ■境内図文字が小さすぎて読めない ■PDAを利用した境内案内例	山門(手を洗う、口をゆすぐ) ■車椅子でも可 ■外国人でも理解できるよう 日本の文化である説明がほしい
山門	手を洗う 口をゆすぐ		
参拝路	順路をすすむ 景観を楽しむ 文化財を楽しむ	参拝路(順路をすすむ) ■じゃり、道の傾き、階段介護者がいても観光困難	景観を楽しむ! ■日本らしさ、お寺らしさ、統一感
参拝グッズ	歴史を学ぶ グッズを購入する おみくじを購入する 絵馬を購入する 絵馬を記入する 絵馬を結ぶ	参拝グッズ等 ■窓口の高さ ■絵馬、おみくじ等日本文化解説	歴史を学ぶ! ■歴史解説、英訳解説、日本文化解説
参拝	鐘をならす お賽銭をいれる 参拝する(寺院外) 参拝する(寺院内)		
トイレ	トイレを探す 用をたす 手を洗う	トイレ ■車椅子や外国人対応 清潔さ	
休憩所	椅子に座る 飲み物を飲む たばこを吸う	休憩所 ■日本らしさ、お寺との景観	
看板	順路標識 警告 境内図	看板 ■全体的な統一感、わかりやすさ、英訳、ふりがな等	

寺社におけるUD現状解析

- 観光客への案内、トイレ、休憩までふくめたシームレスでトータルなおもてなしシステムが不完全
- 一京都のきめこまやかなおもてなしを意識したシステムづくり
- 子供から高齢者、外国人、障害者まで様々な観光客が来訪するという配慮が少ない
- 英語などの外国語解説、ふりがな、段差解消スロープ等
- インフォメーションが少ない
- 境内案内、歴史解説、バリアフリー情報等

このままでは、歴史や信仰の正しい理解もされないうまま京都の貴重な社寺仏閣が単なる観光スポットとしての認識しかされなくなるのではないかと！

寺社におけるUD改善提案

- 歴史解説や境内案内などわかりやすいサインや案内
- 歴史解説や境内案内などのやさしいパンフレット
- 情報ツールや音声ガイドを用いた案内(例、清水寺)
- 京都らしいおもてなしの心の具現化

寺社におけるUD改善提案1例(看板・サイン)

サイン表示の改善提案



■歴史解説サイン例

龍門の傍に「龍門の傍」には、龍が棲むと信じられていた。中国の鎮守「金龍門」に因んで「龍門」と呼ばれる。A tradition of China "If the carp crosses the waterfall, become a dragon". "Ryugumon" connected to it is put on "Ryugumon no Sae". "Ryugumon" means a carp stream. "Ryugumon no Sae" means waterfall in longmen.

■誰でもわかりやすい表示の視認性ガイドラインを提案

照度	遵守すべき規準		推奨基準	
	80lx	300lx	80lx	300lx
1.仮名・漢字				
1.1文字高さ	7mm	6.5mm	8.5mm	7.5mm
1.2明度コントラスト				
a)暗背景(ネガ)	4以上	4以上	7以上	6以上
b)明背景(ポジ)	3以上	4以上	7以上	6以上
2.英数字				
2.1文字高さ	7mm	6mm	6.5mm	7mm
2.2明度コントラスト				
a)暗背景(ネガ)	4以上	4以上	7以上	6以上
b)明背景(ポジ)	3以上	4以上	7以上	6以上

⇒サインの文字高さ、明度コントラストについてのみ、簡易的な調査を行い、視認性ガイドラインを作成した。今後の課題として、サインの設置位置、カラーリング利用者の導線等も含め、十分な調査を行い、より詳しいUDガイドラインを提示する。

会場へのアクセスマップ

(主催 京都工芸繊維大学久保研究室)



発表者：京都工芸繊維大学 佐藤圭一

第2回国際UD会議の来場者が、無事に会場に到着するためのアクセスマップを作成した。進め方は、UDタスク分析を行い、被験者による実地検証実験を行った。IAUD標準化研究WGのUDマトリックスをベースに、京都駅～会場へのアクセスマトリックスを作成し、実地検証を行った。その結果から、会場までのアクセスにおける問題点を抽出し、健常一般人と課題がある2ケース「①車椅子利用者」、「②視覚障害者(全盲)」に対応したアクセスマップを作成し、ホームページに掲載した。

プロセス

アクセスUDマトリックス

■UDマトリックスとは、利用者それぞれの状況に応じたUDにおける要求事項や、利用する際の問題点を効率よく抽出するためのツールである

●横軸に、「みる」「きく」などの人間の身体的機能別にそれぞれユーザグループを設定

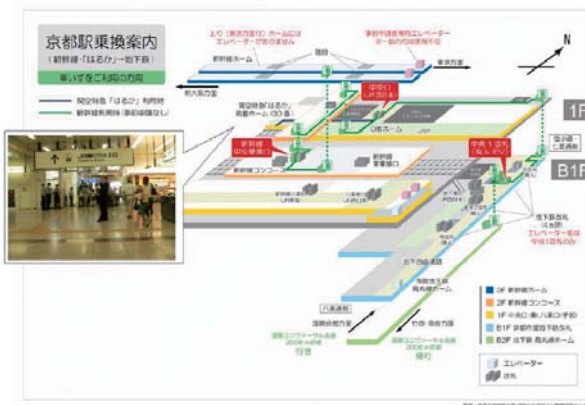
見る				聴く				移動				理解		
視野	視力	加齢性	色覚異常	聴力	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性	加齢性
視野狭窄	全盲	弱視	矯正視力0.2～0.6	白内障	色部	全失聴	聴覚障害	聴覚障害	聴覚障害	聴覚障害	聴覚障害	聴覚障害	聴覚障害	聴覚障害

●縦軸に、シーンを設定し、人間の行動別に、それぞれタスク(動作)とサブタスクを設定

シーン	タスク	サブタスク
JR駅構内	改札を探す	案内板・サインの確認
	移動する、階段、エスカレーター、エレベーターを使う	エレベーターを呼ぶボタンを押す 行きたい階のボタンを押す
	改札を受ける	改札の入りの確認 自動改札に切符を入れる

●交差するセル上に、配慮すべきポイントを記載

アクセスマップ



実地検証

■UDマトリックスを用いて、新幹線又は開空特急はるかを降車してから、会場までのルートを手椅子利用者、視覚障害者(全盲)、聴覚障害者をモニターとして検証を行った

新幹線ホーム



- エレベーター付近で雑音が続いているが、何を意味しているのか、理解できない
- ホームからコンコースへの階段を幅寄せを頼りに探す。雑音が多く、聞き取りづらい

マップ上への記載事項

- 新幹線ホーム上のエレベーターの位置
- 階段への点字ブロックを進む方向

新幹線コンコース



- 地下鉄への乗り換え口がわかりづらい
- どこに改札があるのかが、点字ブロックだけではわかりづらい

マップ上への記載事項

- エレベーターを使用する際の乗換ルート
- 改札までの点字ブロック上のルート

JR改札



- 障害者用改札の点字ブロックが切れている
- 改札を出てから、地下鉄改札が、どちらにあるのかが点字だけではわからない

マップ上への記載事項

- 改札を出てから、地下鉄の改札までルートを指示
- 改札点字ブロックが切れていることに注意

地下鉄改札



- 地下鉄ホームへのエレベーターは使用づらい
- 自動券売機に点字がなく、視覚障害の方は使用不可

マップ上への記載事項

- 切符購入の際は、無人改札機のインターホンで係員を呼び出す必要がある

京町家とUD

(主催 京都工芸繊維大学久保研究室)



発表者：京都工芸繊維大学 大北志帆

京町家は平安朝から今に至るまで、京都人の生活や町並みを守り続けてきた。しかし、今日京町家はその住人にとって安全で住みやすいとは言いがたい。残すべき京町家を対象に、誰もが安心して住まう町家とは、UD概念を投入し今後の京町家とはどうあるべきかを検討した。このことは、伝統文化を継承し、激しい時代変化に対応していくことを同時に満たすこと目的としている。京町家の歴史的意義や建築的価値を学び、

快適かつ利便な生活の課題を取り上げ、UDによる解決を検討した。ケーススタディとして西陣の某家における二律背反する課題の具体的解決を図る提案をまとめた。

京町家の現状N邸 長年町家に住み『過酷な季節でも不便なところにも慣れ、楽しく生活している』。しかし、おばあちゃんは危険なので近くのマンションに移った



UD京町家案 京町家らしさの表象である 土間、オモチ、ミセ、オウの間を残し、高齢者が永く住まえる空間に改修する



町家UDチェックポイント

- ☑ 段差は最小限
- ☑ 冬の寒さ対策 ヒートショックの解消
- ☑ 階段の勾配緩やか 手すり 足元照明
- ☑ 必要なところには手すり
- ☑ UD設備: トイレ バス キッチン
- ☑ 電気回路の増設
- ☑ 緊急通報装置の設置
- ☑ 家具配置に配慮
- ☑ 色彩・照明計画
- ☑ 安心感



残すべき京町家らしさ

+

加えるべきUD配慮



UD教育と実践

(主催 京都府立大学三橋俊雄教授、京都工芸繊維大学提供)



発表者：京都府立大学 三橋教授

ホームヘルパーの労働軽減・効率化をはかる在宅高齢者介護用具の最適化に関し、京都市内の介護実態（食事・排泄介護、手動リフトによる移動・入浴介護、車椅子による移動介護、シャワーキャリーによるシャワー介護、身体介護と家事援助）について、デジタルビデオ撮影、インタビュー調査、間取り調査を実施した。その結果、最適化の設計指針として、1) 適正介護姿勢誘導性デザイン、2) 自助能力誘導性デザイン、3) 要介護者の介護参加性デザイン、4) 一連介護合理性デザイン、5) 介護用具が浮いていることのデザイン問題、6) 癒し・心の安寧のデザイン、7) 十分なヘルパー介護技術、などの最適化の設計指針を明らかにした。

介護の種類	不適合の評価										人数	不適合の内容	
	食事介護	おむつ交換介護	全体	適正介護誘導性	自助能力誘導性	介護参加性	一連介護合理性	用具が浮いている	癒し・心の安寧	介護技術			介護制度
<input type="checkbox"/>						■						4	エプロン 着脱しやすいエプロンの必要性
<input type="checkbox"/>									■			6	車椅子 車いすですばやく体を安定させるべき
<input type="checkbox"/>					■							5	食事 食事環境が悪い、美しく、姿勢・向き
<input type="checkbox"/>										■		5	口腔ケア 食後の口腔ケアの必要性
<input type="checkbox"/>										■		8	食後 食後すぐに寝かせるのはよくない
		<input type="checkbox"/>				■						6	ベッド柵 取り外しの便利なベッド柵が必要
		<input type="checkbox"/>									■	5	ベッド ベッドまわりが雑然としている
		<input type="checkbox"/>									■	6	オムツ 体位変換が多くて本人がつからそう
		<input type="checkbox"/>									■	4	オムツ おむつ交換時は陰洗もするべき
		<input type="checkbox"/>			■							5	オムツ 中腰での作業が長い（ベッドが低い）
		<input type="checkbox"/>			■							4	介護技術 ベッドの高さ調節の必要性
		<input type="checkbox"/>									■	6	空間 部屋が狭い
		<input type="checkbox"/>			■							11	会話 声かけが少ない
		<input type="checkbox"/>			■							4	環境 利用者の意識を高める工夫が必要（食事、雰囲気）
											■	4	会話 家族とのコミュニケーション
		<input type="checkbox"/>			■	■			■			6	不安感 介護されることへの不安感除去（移乗時の手掛け）
		<input type="checkbox"/>			■							10	自助 右手の残存能力を活用できるような介護



食事介護ビデオ解析・評価（抜粋）

■ 適正介護姿勢誘導性デザイン

■ 介護参加性・自助能力誘導性デザイン



フットレスト開脚型車椅子



ヘルパーつかまりベスト

人にやさしいものづくり

(主催 株式会社 ワコール、京都工芸繊維大学提供)



発表者：(株)ワコール 坂本晶子

ワコールの主力商品であるブラジャーを例に、人間研究をもとに開発した事例を紹介。ワコールのブラジャー開発は年間数百種類以上にのぼるが、これらは顧客の年齢や生活シーンの違いを考慮し開発している。即ち年齢をとるごとに体型や体質が変化するため、その変化に対応したブラジャーの開発が必要である。ある女性ひとりをとってみてもその人はいろんな生活をしており、その生活シーンに対応したブラジャーが必要となる。その開発事例を具体的に紹介した。

ユビキタス時代におけるインタラクションのユニバーサリティ

(主催 株式会社 ソフトデバイス、京都工芸繊維大学提供)



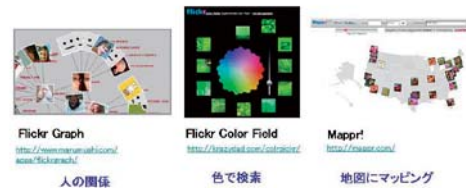
発表者：(株)ソフトデバイス 宮南雅也

ソフトデバイスは、モノとユーザーの認知関係に注目し、人間にとって使いやすく、分かりやすいモノのあり方や、対話の中で生まれる価値づくりを目指すインタフェースデザインを研究開発している企業である。これらの取組を具体的に紹介した。

構造(CGM)



事例:Flickr のユーザによるUI



使われる／応用される事で価値を高める

「楽しみ」のノーマライゼーション

(主催 株式会社GK京都, 京都工芸繊維大学提供)



発表者：(株)GK京都 梶川伸二

“univehicle”とは、“universal (全ての人の)”と“vehicle (乗り物、表現手段)”とを合成した造語である。GK京都は univehicle の開発を通じて、障害者と健常者の区別なく、全ての人がありのままに生き、そして共に暮らせる社会の実現を、ものづくりの視点から提案するものである。univehicle.net (ユニビークル・ドット・ネット)”は、身体能力や年齢に関係なく多くの人々が楽しめるスポーツ遊具を開発する、利用者と設計者と製作者が一体となったコミュニティ。

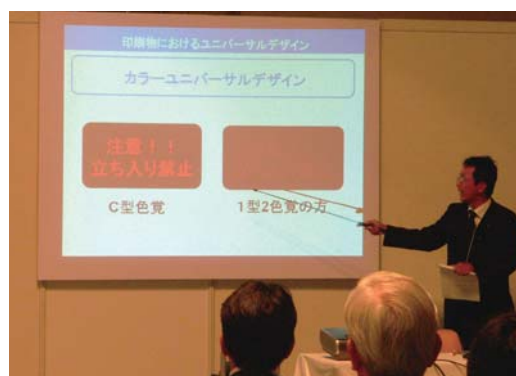
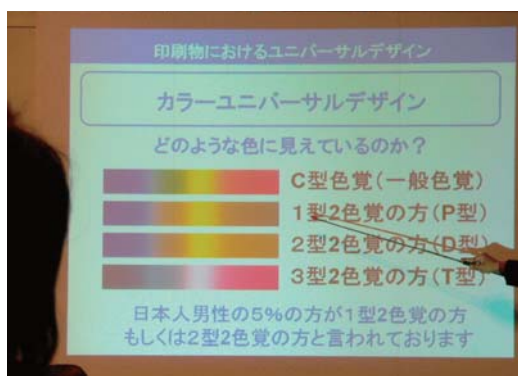
カラーユニバーサルデザイン

(主催 大平印刷株式会社, 京都工芸繊維大学提供)



大平印刷は、ユニバーサルデザインの要素を印刷物に盛り込み、「ユニバーサルプリンティング」という名称で人と地球に優しい印刷物の作成に取り組んでいる。

Universal Printing® 今回は、色覚に障害のある方に配慮した“カラーユニバーサルデザイン”をテーマに、同じ研究を行っている伊藤光学工業と共同で研究や取り組み事例を紹介した。



発表者：大平印刷(株) 西岡隆男

10月25日

親と子のエコ&ユニバーサルデザインのためのワークショップ

(主催 京都造形芸術大学 子ども芸術大学)

2006年10月25日(水)、国立京都国際会議場で「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2006in京都」が開催された。トヨタや日産、SONYなど名だたる会社が力を入れて自社の製品を展示するなかで、そのブースの脇に設置された京都コーナーでひととき目立つイベントが行われていた。それが「親と子のエコ&ユニバーサルデザインのためのワークショップ」である。このワークショップの主旨は、「ユニバーサルデザイン」とは何かという問いかけを身体を通して感じ、考えてみるきっかけを作ろうというものである。

家庭用プールに大量のシュレッダーで裂かれた紙が投げ込まれ、このワークショップに集まった「こども芸術大学」の子ども達や他の幼稚園の園児達がいっせいにプールに飛び込み、紙を投げ合い紙まみれになりながら遊んだ。ひととおり遊んだ後、風船やのり、ビニール袋を使い子どもたち一人一人が紙切れに思い思いの個性豊かな創作を加えていった。一見何かのお遊戯会のようなのだが、このような遊びにこそ「ユニバーサルデザイン」というものを人々に深く考え



さてくれるものがあった。そこには、子どもは世界共通の存在であり、世界みんなの宝である「子ども=ユニバーサル」という考えがあった。子どもにはボーダー(境界線)などなく、日々遊び、発見し、成長していく。時や場所やものを選ばず、生き生きと遊び、楽しみ、感じているのだ。このワークショップの根底には、このような子どもの持つ生きる力から「ユニバーサル」というものを感じ、考えていこうではないかという意図が据えられていたように思う。子どもたちは体を動かすことで、大人は子どもの遊びや創造の中で、子どもに内包された力を感じ学んだワークショップであった。

日本はますます高度高齢化社会になり、同時に国際化も進んでいく。これからの社会は、子



飛び入りの外国の人も、お母さんも、ボランティアの学生の皆さんも、子どもたちと一緒にって!!!!

どもからお年寄りまでという縦の繋がりはもちろんのこと、世界という横のつながりも見越した幅広い商品開発、設備が求められていく。高度な機能だけでなく、万人が安全で無理なく快適に過ごせる暮らしが見直され、重要視されている今、「ユニバーサルデザイン」という考え方もはや避けては通れない。今回の「親と子のエコ&ユニバーサルデザインのためのワークショップ」は「ユニバーサル」というものを見直す良い機会であったように思う。子どもや大人たちが笑顔で帰っていく姿を見た時、まさに子どもの遊びのなかに「ユニバーサル」の原点があったのだと感じずにはいられなかった。

(取材、文章: 京都造形芸術大学 芸術学部ASP学科 徳永佑奈)

この企画にあたって、本学の水野哲雄教授、山崎亮選任講師、笠原広一専任講師、綿貫尚子氏をはじめ、学生の皆さん、そして、華頂短期大学付属幼稚園大田木副園長ほか多くの方々から多大な御協力を頂いたことに、深く感謝の意を表したい。

(文章: 京都造形芸術大学教授、みやこユニバーサルデザイン審議会委員 曾和治好)



今回の「仕掛け人」
水野教授

京都の3大学共同プロジェクト「公共空間のユニバーサルデザイン」

(主催 京都造形芸術大学、立命館大学、京都工芸繊維大学)

■京都の3大学共同プロジェクト「公共空間のユニバーサルデザイン」の総括

(京都造形芸術大学教授、みやこユニバーサルデザイン審議会委員 曾和治好)

公共空間のユニバーサルデザインについての大学共同プロジェクトに関し、簡単に報告します。参加した大学は、京都工芸繊維大学、立命館大学、京都造形芸術大学の3大学です。京都市左京区の出町柳、賀茂川と高野川が合流する地点にある、京都府立鴨川公園出町地区を題材に、UDの視点から、公園のUDについて研究やデザイン提案を行いました。公園は代表的な公共空間のひとつですから、小さな乳幼児を連れたお母さんから、大人、高齢者、身体に障害がある人、国内外の人など、さまざまな特性を持った方が利用できる空間を目指して計画されています。しかし、UDという意識を持って公園を見つめ直した学生の皆さんからは、たくさんのユニークな意見が提案されました。

まず、京都工芸繊維大学からは、公園に代表される公共空間において、ピクトグラムという絵記号を用いて、外国から来られた方や観光客の方などに、様々な情報を効果的に伝達するための研究について報告が行われました。効果的な絵記号の利用は、言葉の壁を超えて、様々な人が理解しあえる手助けとなります。

次に立命館大学からは、公園を出来るだけ多様な方に利用してもらうために、公園の計画やデザインの段階から市民が参加すべきであり、また出来上がった公園の維持管理など、様々な場面において市民が参加できる仕組みをつくるべきだという意見が発表されました。学生達

は、この提案をつくりあげるために、京都府や京都市の方から多くの聞き取り調査を行い、鴨川公園で48時間、つまり丸2日間かけて定点観測を行いました。実際の利用者をしっかりとみつめること、これは公園デザインだけではなく、すべてのデザインの原点です。

最後に、京都造形芸術大学から、デザイン提案が行われました。スロープで高低差をつなぐことは基本として、それをいかに景観にマッチしたものにするか？さりげなく効果的なデザインを行うなど、難しいテーマに挑み、設計図や完成予想模型などを駆使してデザイン提案を行いました。公園の維持管理に市民が参加できるシステムを提案するグループや、出来るだけ多くの人々が賀茂川の水辺に近づくことができるデザインなどもありました。

彼らに共通するのは、京都の歴史や風土を引き継ぎながら、UDにチャレンジしようという思いです。限られた時間ではありましたが、これらの発表について、様々な方と意見交換を行いました。国際



河合、三宅教授、西川社長などから優しくも厳しい好評を頂く。

文化都市京都の歴史

を大切に継承しながら、出来るだけ多くの方に使いやすい、また、ひとにやさしいものづくり、まちづくりを目指すこと。

学生の皆さんからの提案には、みやこユニバーサルデザイン推進条例と共通する、世界へ向けての思いが、しっかりと込められていました。



■コミュニケーション支援記号の評価と改善法の提案

(京都工芸繊維大学教授、みやこユニバーサルデザイン審議会委員 森本一成、同大学生 松本健吾、候 建軍)

コミュニケーション支援用絵記号JIS原案作成委員会によって作成されたコミュニケーション支援記号(絵記号)のわかりやすさについて評価実験を行いました。評価対象とした絵記号は人・動物、動き・様子、飲食物、家の中、家の外ならびに社会・文化の6カテゴリーで、総数は150個でした。実験から得られた正答率を0%~33%、34%~67%、68%~100%の3グループに分け、各グループにある絵記号

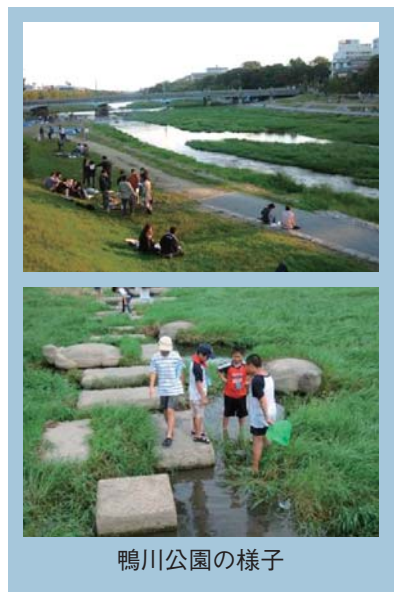


の形状や描かれている内容について分析しました。その結果、わかりにくい記号には組合せ記号が使われている場合が多いとか、わかりやすい絵記号には印象性の強い記号が用いられていることなどがわかってきました。こうして各グループに属している絵記号の特徴を明らかにし、今までより多くの人に分かりやすい記号にするにはどうすればよいかについて検討し、新たなデザイン案を提案しました。今後は、そのデザイン案にそって作成した絵記号のわかりやすさの評価実験を行う予定です。

■公園のユニバーサルデザイン～鴨川公園出町地区観察から

(立命館大学 国際機構課長補佐、講師、DRL環境ものづくりラボ、藤山一郎、
同ラボ大学生 遠藤明日香他)

色々ある「公共空間」、その一つが公園です。地域の皆さんから愛されている公園と、人の少ない公園の違いはなんだろう?という疑問から研究は始まりました。「皆が使いたくなる、ユニバーサルデザインな公園は、“住民参加の公園作り”でできるのかも」。これを、住民参加で作られた鴨川公園・出町地区で確かめてみることに!資料を読んで、出町地区の皆さんはどんな公園が欲しかったのか調べたり、専門家にお話を聞いたり……。自分たちの目で公園の現状を見ようと、連続48時間の観測も実施!これらを通してわかったのは、「住民参加でたくさんの声が反映されたから、色々な使い方ができる、ユニバーサルデザインな公園になった」ということ。皆が使いたくなる公園は、皆で作ってこそできるものでした。



鴨川公園の様子

■学生による公園設計の提案をふりかえって

(京都造形芸術大学環境デザイン学科 准教授 河合 健)

京都造形芸術大学環境デザイン学科ランドスケープデザインコースでは、毎年3回生の後期後半11月半ばから、病院のランドスケープなど、ユニバーサルデザインに関連する課題を与えている。その中で2006年度は、「第2回 国際ユニヴァーサルデザイン会議2006 in京都」が開催され、そこに学生達の作品を発表できるという機会が与えられた。

ランドスケープデザインとは、公園、街路、広場などをつくり、また建築物の配置やデザインなどを調整しながら、人と人、人と自然をつなぐより良い屋外環境を創出する分野である。21世紀のよりよい環境づくりに向けて、多くの都市がその土地の個性を活かした魅力作りに取り組んでいる。ランドスケープデザインは、そうしたこれからの社会全体のニーズと密接につながった分野である。

したがって、大学で学生達に与える設計課題にも、社会としっかりつながりをもったテーマが求められる。今回与えられた機会は、国際会議という場を通して国際社会にメッセージを発信できる、またとない貴重な機会となった。学生達もそのことを敏感に感じ取り、普段には見せたことのないものすごい集中力で課題作成に向かった。無理をするなとこちらが諭しているにもかかわらず、何日間も夜を徹しての作業に進んで取り組む学生もおり、それでもなお、すがすがしい表情をしていたのには驚かされた。普段ははっきり伝えてくることはあまりないが、学生達は、「社会の役に立ちたい」、「自分の技を人々のために活かしたい」、そう切実に願っているのだということがこの機会を通してよく分かった。今後も京都市や実社会で活動される方々と連携しながら、今回のようなリアルなプロジェクトに学生達を関わらせていけることを願う。



グループ単位で、連日、深夜まで、熱心に意見交換をしながら、模型の作成作業に取り組みました。

さて、本学が今回出品した作品のテーマは、「公園におけるユニバーサルデザイン：アートと自然環境との融合」である。ユニバーサルデザインを、アートと自然環境に融合させるような公園をつくること、これが目標となった。特に、アートはユニバーサルデザインにおいて、どのような役割を果たし得るのが重要な検討事項となった。その一つの試みとして、イサムノグチ、ヘンリームーアらの彫刻作品を屋外に置くとすれば、何処にどのように置けば、彫刻作品の力によって、その場所の体験が五感を通して人々の記憶に刻まれるのかを検討した。

賀茂川と高野川の合流地点を敷地として、2006年7月に本学ランドスケープデザインコース3回生6グループと本学通信教育部ランドスケープデザインコースから有志1グループが結成された。またこれに、立命館大学のLCA研究会とATE研究会の学生からなる1グループや京都工芸繊維大学も加わる合同プロジェクトとなった。このような大学間の共同作業が行なわれ、学生同志が異なる視点を学び合えることは、大学の街・京都にふさわしいことと言える。立命館大学のグループは、鴨川公園で、なんと48時間連続の定点観測を行ない、そこから得られた貴重なデータに基づいて提案を行なった。

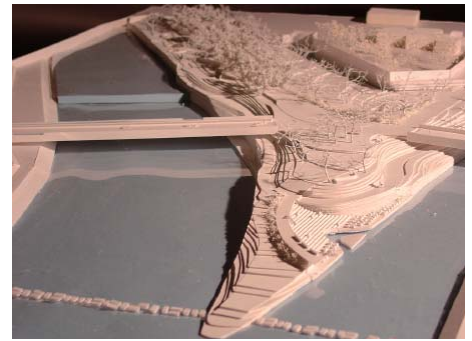
10月半ばに本学の7作品が完成し、すべて力作であったが、教員陣は悩んだあげく、通信教育部からの1作品を含む4作品を国際会館での展示作品として選抜した。「Dragon's Mission」、「サンカクムスビ」、「森のオンガク」、「たまゆらばしのしたかもがわがながれる。」といった、学生ならではのユニークな名前が付けられた作品群である。「Dragon's Mission」では、敷地の歴史性を踏まえつつ、龍のようなうねる地形の曲線美を活かしたダイ

ナミックな新しい地形を創出した。その地形に含まれる曲線のスロープを一つずつ克服してのぼることで身体を回復させるためのリハビリにもなることなどが提案された。

「サンカクムスピ」では、優美な曲線のスロープと広場、並木道が融合するデザインである。下鴨神社糺の森からつながる並木道を抜けてスロープをたどってゆくと、車椅子に乗る人でもいつしか川面にたどりつけるという空間構成になっている。「森のオンガク」では、敷地に必要なものは世代を超えて集える音楽広場であると考え、その音楽広場を使えるようになるためには公園全体を掃除してもらえるチケットを何枚かためる必要がある、というプログラムまでを含めた提案であった。「たまゆらばしのしたかもがわがながれる。」は、提案する公園の環境を実際に手に触って、触覚を通して伝えるという、ユニークなパネル展示が行なわれた。2006年10月25日午後、イベントホール展示場でこれらの作品についての公開講評会を行なった。

今回の展示をご覧になった韓国の団体から、12月にソウルで行なう展示会に学生達の作品を展示させてもらえないかとのお誘いをうけることとなった。結果として、展示作品のパネルが韓国で展示されることとなった。韓国での反応など、まだ聞かせていただけていないが、いずれにせよ、学生達の作品がいきなり国境を超えてゆくあたりが、国際会議の力であることを目の当たりにした。

最後に、この企画に当たって、本学の講師である三宅祥介氏、寺田裕美子氏、西川浩司氏、山崎亮氏、にも多大な御指導、御助言を頂いたことに、心から感謝したい。




 プレイベント, 準備百景
 スナップ
 写真①



その他展示コーナーの概要

■みやこユニバーサルデザインの普及推進（京都市）



京都市では、平成17年4月に政令市では初となる、京都市みやこユニバーサルデザイン推進条例を施行し、その推進に取り組んでいます。国際会議を京都で開催することにより、市民の皆様、身近なものから先進の分野に至るまで、国内外の幅広いユニバーサルデザインの取組を、多くの市民の皆様にご実感していただくことができました。

■顔型に直交ローラーを配置したコンピューター用マウス

（有限会社 ストラトゲイト 小林 整）



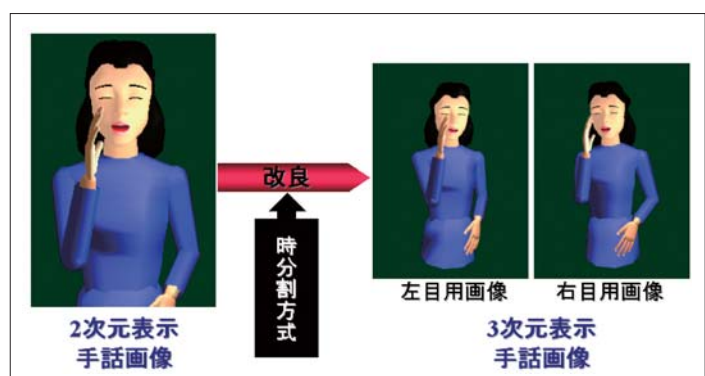
通常のマウスは、障害のある方にとって、「斜め方向の視線追従能力の問題」、「クリックボタンの左右の区別がしにくい」、「手首、腕、肩への負担が大きい」等の問題点があります。その解決策を探る中で、「かおマウス」の完成に到りました。その特徴は「簡単（直交ローラー式）」、「可愛い（顔型デザイン）」、「手に優しい（木製）」、「左右対称なので直感的に分かりやすい。」などです。

分かりやすいデザインで、お子さん達にも、「利用への意欲を引き出す」効果があると言われています。

■手話アニメーションの立体視による分かりやすさの検討

（京都工芸繊維大学教授 森本一成）

視覚障害者のコミュニケーションシステムを研究しています。その中のひとつに手話日本語間の相互翻訳システムを開発する研究があります。手話アニメーションの表示には携帯電話から投影型までの様々なディスプレイが可能で、使用用途に応じて自由に選び利用できます。アニメーションによる手話が読取れるための画像表示条件（画像サイズ、解像度、フレームレートなど）を明らかにすることを目的とした研究をしています。また、生成している手話アニメーションの応用として、聴覚障害者のための胃部レントゲン検査における手話アニメーションによる指示法の分かりやすさを向上させるため、手話アニメーションの立体表現法に関する研究を進めています。従来の平面表現よりもわかりやすい手話アニメーションを表示できることが分かってきました。



■実践ユニバーサルデザイン（京都工芸繊維大学教授 森本一成 他）



京都工芸繊維大学では、平成17年4月の京都市みやこユニバーサルデザイン推進条例の施行にあわせ、大学コンソーシアム京都での単位互換授業「実践ユニバーサルデザイン」を開講しています。この講義では、ユニバーサルデザインの考え方とその実践例について、大学教授、建築士、企業のデザイナー、民間団体など、各界で御活躍の講師の方々に、週代わりで様々な講義をしていただく大変ユニークな授業です。

■ユニバーサルデザイン研究会（京都造形芸術大学 Blanco）



私たちは「ユニバーサルデザイン」と「五感」は、切っても切り離せない関係だと考えます。今回は、五感の中でも特に聴覚というものに焦点をあて、聴覚から想起される場所のイメージの広がりについて追求してみました。同じ場面の音を聴きながらも、それぞれにイメージされる世界には多様な広がりがあることを改めて認識いただき、そして何よりも、私達の集めた音を楽しみながら場面をイメージしていただきました。

■やさしい漆器（京都漆器青年会）



京都漆器青年会は、京都の漆器業界の若手従事者の団体で、京塗（きょうぬり）の伝統をふまえながら、時代にあった漆器のデザインや製作を行っています。この「やさしい漆器」の製作は、より多くの人にとって使いやすい、親しみやすい漆器とはなにかを考え、京漆器のデザインに取り入れることを目標としています。今回は、片口と猪口などの酒器を製作しました。漆器の片口と猪口を「持ちやすさ」を重視した形にするため、20代および60～90代の男女を対象にサンプルデータを採取・分析し、その結果をもとにデザインしました。手順は以下の通りです。

- (1)協力者に粘土模型を握ってもらい「持ちやすい指の位置」のデータを採取する。
- (2)粘土模型を3次元スキャンしデジタルデータ化する。
- (3)データを編集し、全体のデザインを完成させる。

スナップ
写真②

京都コーナー, 当日百景



SPECIAL THANKS

京都コーナーの企画運営に御協力頂いた主な方々です。本当にありがとうございました。
いました。(原則として、本文に記載のない団体や方々を掲載しています。)

(各種団体等の皆さん)

京都市社会福祉協議会
佛教大学
京都市立伏見工業高等学校
京都市立西京高等学校附属中学校
立命館高等学校
京都市立雲ヶ畑小学校
京都市立室町小学校
立命館小学校
華頂短期大学附属幼稚園
ひよこ(要約筆記サークル)

(その他の皆さん)

<京都工芸繊維大学 久保研究室>葛本奈央哉、矢代圭祐、山本筆子、
大竹佳奈、大北志帆
<京都府立大学>庄司智美
<京都造形芸術大学>水野哲雄教授、河合健准教授、笠原広一講師、
三宅祥介講師、西川浩司講師、寺田裕美子講師、山崎亮講師
<立命館大学DRL>友繁佳美、前田有亮、今村比呂志、児玉敦史、吉田邦彦、
立石晋一
<立命館大学>前野大喜
<立命館大学 DRL (ATE研究会・LCA研究会)>遠藤明日香、岡田道明、
可知健太郎、坂上舞、坂部安耶、田村将人、服部和希
<京都造形芸術大学>綿貫尚子、塚前亜季子、上田裕子、内山桃子、
京都造形芸術大学ランドスケープデザインコースの学生、
ユニバーサルデザイン研究会「BLANCO」の学生
<学校法人立命館初等中等教育部>竹中宏文部長、松原修次長
<サークル風>岩根浩、岩根衆、武田早苗子
<珍獣王国関連>山田ひろ子、松本昌幸

*順不同、敬称略

作 成 2007年3月

第2回 国際ユニヴァーサルデザイン会議2006in京都 京都委員会

版下作成 大平印刷 株式会社



The 2nd International Conference on Universal Design in KYOTO 2006
第2回 国際ユニヴァーサルデザイン会議
2006 京都